

夫人利生記

泉鏡花作

全一章

瑠璃色に澄んだ中空の樹の間から、龍が圓い口を
張開いたやうな、釣鐘の影の裡で、密と、美體な婦
の――人妻の――寫眞を視た時に、樹島は
血が冷えるやうに悚然とした。・・・・

山の根から湧いて流るゝ、ちよろ／＼水が、丁ど
此處で堰を落ちて、湛へた底に、上の鐘樓の影が映
るので、釣鐘の清水と言ふのである。

町も場末の、細い道を、たら／＼と下りて、つゞ
と低い處から、又山に向つて徑の坂を蜒つて上る。
その窪地に當るので、淺いが谷底に成つて居る。一
方は其の鐘樓を高く乗せた丘の崖で、もう秋の末な
がら雑樹が茂つて、から／＼と乾いた葉の中から、
晝の月も、鐘の星も映りさうだが、別に札を建てる
ほどの名所でもない。

居まはりの、板屋、藁屋の人たちが、大根も洗へば、菜も洗ふ。葱の枯葉を掻分けて、洗濯などするのである。で、竹の筧を山笹の根に掛けて、流の落口の外に、小さな瀧を仕掛けてある。汲んで飲むものは此を飲むがよし、視めるものは、観るがよし、即ち清水の名聞が立つ。

徑を挟んで、水に臨んだ一方は、人の小家の背戸畠で、大根も葱も植ゑた。竹のまばら垣に籐豆の花の紫がほか／＼と咲いて、そこらをスラ／＼と飛交はす紅蜻蛉の羽から、．．．いや、その羽に乗つて、絲遊、陽炎と云ふ光ある幻影が、春の闌なる如く、浮いて遊ぶ。．．．

一時間ばかり前の事。――樹島は背戸畑の崩れた、此の日當りの土手に腰を掛けて憩ひつゝ、――いま言ふ――その寫眞のぬしを正のもので見たのである。．．．

其の前に、渠は母の實家の檀那寺なる、此の邊の

寺に墓詣した。

俗に赤門寺と云ふ。・・・門も朱塗だし、金剛神を安置した右左の像が丹であるから、いづれにも通じて呼ぶのであらう。住職も智識の聞えがあつて、寺は名高い。

仁王門の柱に、大草鞋が――中には立つた大人の胸ぐらゐなのがある――重つて、稲束の木乃伊のやうに掛つて居る事は、渠が小兒の時に見知つたのも、今もかはりはない。緒に結んだ状に、小菊――あやめ草あしに結ばむ――奥の細道」の趣があつて、健なる神の、草鞋を飾る花たばと見ゆるまで、日に輝きつゝも、何となく旅情を催させて、故郷なれば可懐しさも身に沁みる。

峰の松風が遠く静に聞えた。

庫裡に音信れて、お墓經をと頼むと、気軽に取次がれた住職が、納所とも小僧とも言はず、すぐに下駄ばきで卵塔場へ出向はるゝ。

かあ／＼と、鴉からすが鳴く。・・・墓所はかしよは日陰ひかげで
ある。苔こけに惑まとひ、露つゆに、近づすべつて、樹島きしまがやゝ慌あわたしか
つたのは、餘あまり身輕みがるに和尚をしやうどのが、すぐに先さきへ立たつ
て出でられたので、十八九年ねんぶさた不沙汰ふさたした、塔婆たふばの中なかの
草徑くさみちを、志こころす石碑せきひに迷まよつたからであつた。

紫袂むすひ紗さの輪鈕りんを片手かたてに、

「誰方どなたの墓はかであらつしやるかの。」

少々せう／＼極まりが悪わるく、・・・姓せいを言いふと、

「おゝ、いま立たつて居ゐさつしやるのが、それぢや

がの。」

「御不沙汰ごぶさたをいたして濟すみません。」

黙だまつて俯向うつむいて線香せんかうを供そなへた。細ほそい煙けむりが、裏うらすい
て亂みだるゝばかり、墓はかの落葉おちばは堆うづたかい。濕しめつた青苔あそこけに蠟ろう
燭そくが刺さつて、揺ゆれもせず、燐寸マツチでうつした灯ひがまつ
直すぐに白しろく昇たつた。

チーン、チーン。　　ー　　かあ／＼　　ー　　と鴉からす
が鳴く。

やがて、讀誦どくじゆの聲こゑを留とどめて、

「お志の御回向はの。」

「一同に何うぞ。」

「先祖代々の諸精靈

、願以此功德無量壇波

羅蜜。具足圓滿、平等利益

——南無妙……

此經難時、若暫持、我即勸喜……一切天人皆

應供養。——

チーン。

「ありがたう存じます。」

「はい／＼。」

「御苦勞様でございました。」

「はい。」

と、袖に取つた輪鉦形に肱をあげて、打傾き状に、

墓參の男を熟と視て、

「多くは故人になられたり、他國をなすつたり、

久しく、御墓參の方もありません。……あんな

たは御縁邊であらつしやるかの。」

「お上人様。」

裾冷く、鼻じろんだ顔を上げて、

「——母の父母、兄などが、此方にお世話に

成つて居ります。」

「おゝ、」と片足、胸とゝもに引いて、見直して、

「これは樹島の御息かい。――それとなく

おたよりは聞いて居ります。何よりも御機嫌での。」

「御僧様こそ。」

「いや、もう年を取りました。知人は皆二代、また孫の代ぢや。……しかし立派に御成人ぢやな。」

「お恥かしう存じます。」

「久しぶりぢや、些と庫裡へ。――澁茶など

進ぜよう。」

「かさねまして、いづれ伺ひますが、旅さきの事でございますし、それに御近所に参詣をしたい處もございますから。」

「あゝ、まだお娘御のやうに見えた、若い母さんに手を曳かれてお参りなされた、――あの、摩耶夫人の御寺へかの。」

なき、その母に手を曳かれて、小さな身體は、春秋の蝶々蜻蛉に乗つたであらう。夢のやうに覺えて

居る。

「それは／＼。」

と頷いて、

「また、今のはどは、御丁寧に――早速御佛前へお料具を申さう。――御子息、それならば、

お静に。……あゝ、上の其の木戸はの、錠、

鍵も、ぐわさ／＼と壊れて居ます。開けたまゝで宜

しい。あとで寺男が直しますでの。石段が缺けて草

蓬々ぢや、堂前へ上らつしやるに氣を着けなされ

よ。」

此の卵塔は窪地である。

石を四五壇、せまり伏す枯尾花に鼠の法衣の隠れ

た時、ばさりと音して、塔婆近い枝に、山鴉が下り

た。葉がくれに天狗の枕のやうに見える。蠟燭を啄

まうとして、人の立去るのを待つのである。

衝と衝へると、大概は山へ飛ぶから間違はないの

だが、怪我に屋根へ落すと、草葺が多いから過失を

為出来すことがある。樹島は心得て吹消した。線香

の煙の中へ、色を淡く分けてスツと蠟燭の香が立つ
と、かあ／＼と堪らなさうに鳴立てる。羽音もきこ
えて、聲の若いのは、仔鳥らしい。

「・・・お食り。」

それも供養に成ると聞く。こゝにも一羽、とおな
じやうな色の外套に、洋傘を抱いて、ぬいだ中折帽
を持添へたまゝ葎の中を出たのであつた。

赤門寺に限らない。或は丘に、坂、谷に、徑を縫
ふ右左、町家が二三軒づゝ門前にあるばかりで、殆
ど寺つゞきだと言つても可い。赤門には清正公が祭
つてある。北辰妙見の宮、摩利支天の御堂、辨財天
の祠には名木の紅梅の枝垂れつゞ咲くがある。明
星の丘の毘沙門天。蟲齒封じに箸を供ふる辻の坂の
地藏菩薩。時雨の如意輪勸世音。笠守の神。日中も
梟が鳴くと言ふ森の奥の虚空藏堂。――

清水の眞空の丘に、鐘樓を營んだのは、寺號は別
にあらう、皆梅鉢寺と覺えて居る。石段を攀ぢた境
内の櫻のもと、分けて鐘樓の礎のあたりには、高山

植物として、恚うした町近には殆どみだされないと
稱ふる處の、梅鉢草が不思議に咲く。と言傳へて、
申すまでもなく、學者が見ても、たゞ心ある大人が
見ても、類は違ふであらうけれども、五辨の小さな
白い花を摘んで、小兒たちは嬉しがったものである。
――尤も十ぐらゐまでの小兒が、家から此處へ
来るのには、お辨當が入用だつた。――それだ
けに思出が尚ほ深い。

いま咲く草ではないけれども、土の香を親しん
で……樹島は赤門寺を出てから、仁王尊の
大草鞋を船にして、寺々の巷を漕ぐやうに、秋日和
の巡禮街道。――一度此の鐘樓に上つたのであ
つたが、攀ぢるに急だし、汗には且つ成る、地内は
いづれ佛神の垂跡に面して身がしまる。
旅のつかれも、ともに、吻と一息したのが、いま
清水に向つた大根畑の縁であつた。

遅めの午飯に、――瀉で漁れる――
わかさを焼く香が、淡く遠くから匂つて来た。暖
か過ぎるが雨には成るまい。赤蜻蛉の羽も、もみぢ

を散して、青空に透通る。鐘は高く龍頭に薄霧を捲いて掛つた。

清水から一坂上り口に、薪、漬もの桶、石臼なんどを投遣りにした物置の破納屋が、炭焼小屋に見えるまで、あたりは靜に、人の往來はまるでない。

月の夜は此の納屋の屋根から霜に成るであらう。その石臼に縋つて、嫁菜の咲いたも可哀である。

あゝ、桶の箍に尾花が亂るゝ。此の麗かさにも秋の寂しさ

樹島は歌も句も思はずに、畑の土を、外套の背にずり込めて、半ば寝つゝも、金剛神の草鞋に乗つた心持に恍惚した。

ふと鳥影が・・・影が翳した。其處に、つい目の前に、しなやかな婦が立つた。何・・・紡績らしい緋の一枚着に、めりんす友染と、繻子の幅狭な帯をお太鼓に、上から紐でしめて、褪せた桃色の襷掛け・・・などゝ言ふより、腕露呈に、

脇を一杯に張つて、片脇に盥を抱へた……と
言ふ方が早い。洗濯をしに來たのである。道端の細
流で洗濯をするのに、なよやかなど言ふ姿はな
い。……ないのだが、見たゞけでなよやかで、
盥に力を入れた手が、霜を溶いたやうに見えた。白
やかな膚を徹して、骨まで美しいのであらう。しか
も、素足に冷めし草履を穿いて居た。近づくのに、
音のしなかつたのも頷領かれる。

婦は、水ぎはに立停まると、洗濯盥――盥に
は道草に手打つたらしい、嫁菜が一束挿してあつた
――それを石の上へごみ腰におろすと、すつ
と柳に立直つた。日あたりを除けて來て、且つ汗ば
んだらしい。姉さん被りの手拭を取つて、額よりは
頸脚を軽く拭いた。やゝ俯向けに成つた項は雪を欺
く。……手拭を口に銜へた時、それとはなし
に、面を人に打蔽ふ風情が見えつゝ、眉を優しく、
斜だちの横顔の、瞳の濡々と黒目勝なのが、ちらり
と樹島に移つたやうである。颯と睫毛を濃く俯目に
成つて、頸のおくれ毛を肱白く搔上げた。――
漆にちらめく雪の蒔繪の指さきの沈むまで、黒く房

りした髪を、耳許清く引詰めて櫛巻に結つて居た。
年紀は二十五六である。すぐに、手拭を帯に挟んで
――岸からすぐに俯向くには、手を一差伸して
も、流は低い。石段が出来て居る。苔も草も露を引
いて皆青い、それを下り状に、ふと猶豫つたやうに
見えた。あゝ、これは心ないと、見て居るものの心
着く時、褌を取つて高く端折つた。婦は誰も長襦袢
を着て居るとは限らない。たゞ一重の布も、膝の下
までは蔽はないで、小股をしめて、色薄く縊りつゝ、
太脛が白く滑かにすらりと長く流に立つた。

ひた／＼と絡る水とともに、ちら／＼と紅に目を
遮つたのは、倒に映ると言ふ釣鐘の龍の炎でない。
脱棄した草履に早く戯るゝ一羽の赤蜻蛉の影でない。
崖のくづれを雑樹また藪の中に、月夜の骸骨のやう
に朽亂れた古卒堵婆のあちこちに、燃えつゝ曼珠沙
華が咲残つたのであつた。

婦は人間離れをして麗しい。

此の時、久米の仙人を思出して、苦笑をしないも

のは、われらの中に多くはあるまい。

仁王の草鞋の船を落ちて、樹島は腰の土を拂つて立つた。面はいつの間にか伸びて居る。

「失禮ですが、一寸伺ひます。――旅のものですが。」

「は、」
「連行寺と申しますのは？」

「摩耶夫人様のお寺でございますね。」

その聲にきけば、一層奥ゆかしく尚ほたふとい切利天の貴女の、さながらの御かしづきに對して、渠は思はず一禮した。

婦は丁度笥の水に、嫁菜の莖を手すさびに浸して居た。淺葱に雫する花を楯に、破納屋の上路を指して、

「その坂をなぞへにお上りなさいますと、――戸がしまつて居りますが、二階家が見えませう。

――ね、その奥に、あの黒く茂りましたのが、虚空藏様のお寺でございます。ちやうどその前の處

が、青く明く成つて、ちら／＼もみぢが見えますわね。彼處が摩耶夫人様でございます。」

「何うもありがたう。――尋ねたいにも人通りがないので困つて居ました。――お庇様で

「いゝえ。――まあ。」

「御免なさい。」

「お静におまゐりをなさいます。――御利益がございますわ。」

と、嫁菜の花を口許に、瞼をほんのり莞爾した。

――此の婦人の寫眞なのである。

寫眞は、蓮行寺の摩耶夫人の御堂の壇の片隅に、千枚の歌留多を亂して積んだやうな寫眞の中から見出された。たとへば千枚千人の婦女が、一人づつ皆嬰兒を抱いて居る。お産の祈願をしたものが、禮詣りに供ふるので、即ち活きたまゝの繪馬である。胸に抱いたのも、膝に据ゑたのも、中には背に負いたまゝ、兩の掌を合せたのもある。が、胸をはだけた、乳房を含ませたりしたのは、さすがにないから、

何も蔽おほはず、寫眞しゃしんはあからさまに成なつて居ゐる。しか
し、婦をんなばかりの心こころだしなみで、いづれも伏ふせてある
事ことは言いふまでもない。

此この寫眞しゃしんが、いま言いつた百人にん一首しゆの歌留多かるたのやう
に見みえるまで、御堂みだうは、金碧きんぺき蒼然さうぜんとしつゝ、漆うるしと朱しゆ
の光ひかりを沈しづめて、月影つきかげに青あをい錦にしきを見みるばかり、嚴おごそかに端たゞ
しく、清きよらかである。

御厨子みづしの前まへは、縦たてに二十間にじゅうけんがほど、五壇ごだんに組くんで、
紅くれなゐの袴はかま、白衣びやくゑの官女くわんぢよ、烏帽くろぼう子し、素砲すはうの五人にん囃子ばやしのな
いばかり、きらびやかなる調度てうどを、黒棚くろだなよりして、
膳部ぜんぶ、轆ながえの車くるままで、金高きんたか蒔繪まきゑ、青貝あわがひを鏤ちりばめて隙間すきまな
く並ならべた雛壇ひなだんに較くらべて可いい。たゞ緋毛氈ひまうせんのかはりに、
敷妙しきたへの錦にしきである。

盡ことごとく、これは土地とちの大名だいみやう、城内じやうないの二紳しん、豪族がうぞく、富ふ
商やうの奥おくよりして供そなへたものと聞きく。家々いえいえの紋もんづく
しと見みれば可いい。天人てんにんの舞樂ぶがく、合天井がふてんじやうの紫むらさのなか
ば、古錦欄こきんらんの天蓋てんがいの影かげに、黒塗くろぬりに千羽鶴せんばつるの蒔繪まきゑをし
た壇だんを据すゑて、紅白こうはく、一つおきに布ぬのを積つんで、媚なまめか

しく堆い。皆新しい腹帯である。志して詣でた日に、折から其の紅の時は女の兒、白い時は男の兒が産れると傳へて、順を亂すことをしないで受けるのである。

右左に大な花瓶が据つて、此處等あたり、花屋凡そ五七軒は、圍の穴藏を拂つたかと思はれる見事な花が夥多しい。白菊黄菊、大輪の中に、桔梗がまじつて、女郎花のまだ枯れないのは、功德の水の恵であらう、末葉も落ちず露がしたゝる。

時に、腹帯は紅であつた。

渠が詣でた時、蠟燭が二挺灯つて、その腹帯臺の傍に、老女が一人、若い圓鬚のと睦じさづに拝んで居た。

しばらくして、戸口で又珠數を揉頂いて、老女が前に、その二人が歸つたあとは、本堂、脇堂にも誰も居ない。

こゝに註して置く。都會にはない事である。此のあたりの寺は、何處にも、へだて、戸じまりを置かないから、朝づとめよりして夕暮までは、諸天、諸佛。――中にも爾く端麗なる貴女の奥殿に伺候するに、門番、諸侍の面倒は聊かもないことを。

寺は法華宗である。

祖師堂は典正なのが一つ棟に別にあつて、幽嚴なる夫人の廟より其の御堂へ、細長い古疊が欄間の黒い虹を引いて續いて居る。……廣い廊下は、霜のやうに冷うして、虚空藏の森をうけて寂然として居た。

風すかしに細く開いた琴柱窓の一つから、森を離れて、松の樹の姿のいゝ、赤土山の峰が見えて、色が秋の日に白いのに、向越の山の根に、きら／＼と一面の姿見の光るのは、遠い湖の一部である。此方の麓に薄もみぢした中腹を弛く繞つて、巳の字の形に一つ蜿つた青い水は、町中を流るゝ川である。町の上には霧が掛つた。その霧を抽いて、青天に聳え

たのは昔の城の天守である。

聞け ー ー 時に、この虹の欄間に掛けならべた、
押繪の有名な額がある。 ー ー いま天守を絛した。
其の城の奥々の婦人たちが丹誠を凝した細工である。

萬亭應賀の作、豊國畫。 錦重堂板の草雙紙、 ー ー

その頃江戸で出版して、文庫藏が建つたと傳ふる
まで世に行はれた、釋迦八相倭文俤の挿畫のうち、
摩耶夫人の御ありさまを、繪のまゝ羽二重と、友染
と、綾、錦、また珊瑚をさへ鏤めて肉置の押繪にし
た。

淨飯王が狩の道にて ー ー 天竺、天臂城なる豪
貴の長者、善覺の妹姫が、姉君嬌曇彌とゝもに、は
じめて見ゆる處より、優陀夷が結納の使者に立つ處、
のちに、嬌曇彌が嫉妬の處。 やがて夫人が、一度、
幻に未生のうなゐ子を、病中のいためる御胸に、抱
きしめ給ふ姿は、見る目にも痛ましい。 その肩にた
れつゝ、みどり兒の頸を蔽ふ優しき黒髪は、いかな
る女子のか、活髪をそのまゝに植ゑてある。

われら町人の爺媼の風説であらうが、嬌曇彌の呪の押繪は、城中の奥のうち、御臺、正室ではなく、却つて當時の、側室愛妾の手に成つたのだと言ふのである。しかも、その愛妾は、繪をよくして、押繪の面描は皆その彩筆に成つたのだと聞くのも意味がある。

夫人の姿像のうちには、胸やゝあらはに、あかんばんのお釋迦様を抱かるゝのがあるから、――憚りつゝも謹んで説はう。

こゝの押繪のうちに、夫人が姿見のもとに、黒塗の蒔繪の盥を取つて手水を引かるゝ一面がある。眞珠を雪に包んだやうな、白羽二重で、膚脱の御乳のあたりを装つてある。肩も背も半身の膚あらはにはする。

牙の六つある大白象の背に騎して、兜率天よりし雲を下つて、白衣の夫人の寢姿の夢まくらに立た

せたまふ一枚のど、一面やゝ大なる額に、かの藍毘
尼園中、池に青色の蓮華の開く處。無憂樹の花、色
香鮮麗にして、夫人が無憂の花にかざしたる右の手
のその袖のまゝ、釋尊降誕の一面とは、ともに城の
正室の細工ださうである。

面影も、色も靨黷いて、欄間の雲に浮出づる。影
はさゝぬが、香にこぼれて、後にひかへつゝも、疊
の足はおのづから爪立たれた。

疊廊下を引返し状に、敷居を出る。・・・夫
人廟の壇の端に、その寫眞の數々が重ねてあつた。

押繪のあとに、時代を違へた、寫眞を覗くのも學
問である。

清水に洗濯した美女の寫眞は、たゞその四五枚め
に早く目に着いた。圓鬘にこそ結つたが、羽織も着
ないで、女の兒らしい嬰兒を抱いて、寫眞屋の椅子
にかけた像は、寸分の違ひもない。

恚うした寫眞は、公開したもおなじである。産の安らかさに、兒のすこやかさに、いづれ願ほどにあやかるため、その一枚を選んで借りて、ひそかに持歸る事を許されて居る。たゞし遅速はおいて、複寫して、夫人の御人々御中に返したてまつるべき事は言ふまでもなからう。

今日は方々にお賽銭が多い。道中の心得に、新しく調べた懷中に半紙があつた。

目の露したゝり、口許も綻びさうな、寫眞を取つて、思はず、四邊を見て半紙に包まうとした。

トタンに人氣勢がした。

樹島はハツとあかくなつた。

猛然として憶起した事がある。八歳か、九歳の頃であらう。雛人形は生きて居る。雛市は彌生ばかり、たとへば古道具屋の店に、其の姿があるとする。……心を籠めて、ちつと凝視めるのを、毎日のやうに、凡そ七日十日に及ぶと、思入つた其の雛、その人形は、莞爾と笑ふと言ふのを聞いた。

「ー 時候は覺えて居ない。小學校へ通ふ大川の橋一つ越えた町の中に、古道具屋があつて、店に大形の女雛ばかりが一人あつた。臍長けた美しさは註するに及ぶまい。ー 樹島は學校のかへりに極つて、半時ばかりづゝ熟と凝視した。」

目は、三日四日めから、もう動くやうであつた。最後に、その唇の、幽冥の境より霞一重に暖かいやうに莞爾した時、小兒はわな／＼と手足が震へた。同時である。中仕切の暖簾を上げて、姉さんだか、小母さんだか、綺麗な、容子のいゝのが、すつと出て来て、「坊ちゃん、あげませう。」と云つて、待て・・・その雛ではない。定紋つきの塗長持の上に据ゑた緋の袴の雛のわきなる柱に、矢をさした扱と、細長い瓢箪と、靈芝のやうなものとし所に掛けてあつた、ー さ、此が變だ。のちに思つても可思議なのだが、・・・くれたものと言ふと拂子に似て居る、木の柄が、草石蠶のやうに巻きぼりして、蝦色に塗つてある。さきの處に、一尺ばかり革の紐がばらりと一束ついて居る。繪で見た大將が持つ采配を略したやうな、何にするものだから、今

もつて解らない。が、町々辻々に、小兒と云ふ小兒が、皆おもちや持つて、振つたり、廻したり、空を拂いたりして飛廻つた。半年ばかりですたれたが一種の物妖と稱へて可からう。持たないと、生効のないほど欲しかつた。が樹島にはそれがなかつた。それを、夢のやうに與へられたのである。

橋の上を振廻して、空を切つて駈戻つた。が、考へると、・・・化拂子に尾が生えつゝ、宙を飛んで追駈けたと言はねば成らない。母のなくなつた、一周忌の年であつた。

父は兒の手の化ものを見ると青くなつて震へた。小遣錢をなまで持たせないその兒の、盗心を疑つて、怒つたよりは恐れたのである。

眞偽を道具屋にたしかめるために、祖母がついて、大橋を渡る半ばで、母のおくつきのある山の峰を、孫のために拝んだ、小兒も小さな兩手を合せた、此時の流の音の可恐さは大地が裂けるやうであつた。

「あゝ、然うとは知りませぬ。――小兒衆の

頑くわんげ是ぜない、欲ほしいものは欲ほしからうと思おもうて進しんぜま
した。・・・・毎日まいにち見てござつたは雛ひなぢやつたか。
――それは／＼。・・・・此この雛ひなは些ちと大金たいまい
のものゆゑに、進しん上じやうは申まをされぬ。――お邪じや魔までな
くば其その玩おも弄ちや品は。と、確しかと祖そ母ぼに向むかつて、道だう
具ぐ屋やが言いつてくれた。が、しかし、その時ときのは綺麗きれい
な姉ねえさんでも小を母ぼさんでもない。不ぶ精じやう髻ひげの胡こ麻まし鹽ほの
親おやぢ仁にであつた。唯と、ばけものは、人ひとの慾よくに憑ついて邪じや
心しんを追おつて來きたので、優やさしい婦ひとは幻まぼろし影ばかり。道だう具ぐ屋や
は、稚をさないのを憐あはれがつて、嘘うそで庇かばつてくれたのであ
らうも知しれない。――思おも出ひだすたびに空そら恐おそろしい
氣きが何い時つもする。

――おなじ思おもひが胸むねを打うつた。同どう時じであつた、
――ひとけはひ
人氣にき勢せがした。

――御み厨づ子しの裏うらへ通かよふ板いた廊らう下かの正しやう面めんの、簾すだれすか
しくわんおんの勸くわん音おんびらきの扉ひが半なかば開ひらきつゝ薄うす明あかるい。・・・
・・それを斜なにさし覗のぞいた、半はん身しんの氣け高たかい婦ふ人じんがあ
る。白びやく衣えに緋ひを重かさねた姿すがただと思おもへば、通つ夜やの籠こも堂だうに
居あ合あせはた女によ性じやうであらう。小こ紋もんの小こ袖そでに丸まる帶おびと思おもへば、

寺には、よき人の嫁ぐならひがある。――あと
で思ふとそれも臃である。あの、幻の道具屋の、綺麗
麗な婦のやうでもあつたし、襦袢姿振袖の額の押繪
の一體のやうにも思ふ。……

瞬間には、たゞ見られたと思ふ心を、棒にして、
前後も左右も顧みず、衝々と出、その裳に両手をつ
いて跪いた。

「小兒は影法師も授りません。……たゞあ
やかりたう存じます。――寫眞は……拝
借出来るのでございませうか。」
舌はこゝで爛れても、よその女を戀ふるとは言へ
なかつたのである。

「どの、お寫眞。」
と朗に、しつとり聞えた。およそ、妙なるものご
しとは、此の時言ふべき詞であつた。

「は、
と載せたまゝ白紙を。
「お持ちなさいまし。」

あなたの手で、スツと微かな、・・・・二つに折れた半紙の音。

「は、は。」

と額に押頂くと、得ならず艶なるものゝ薫に、魂は空になりながら、恐怖と恥とに、渠は、ずる／＼と膝で退つた。

よろりと立つ時、うしろ姿がすつと隠れた。

外套も帽も引搦んで、階を下りる足が迂る。其處へ身體ごと包むやうな、金剛神の草鞋の影が、髣髴として顯れなかつたら、渠は此の山寺の石の壇を、徑へ轉落ちたに相違ない。

雛の微笑さへ、蒼穹に、目に浮んだ。金剛神の大草鞋は、宙を踏んで、渠を坂道へ櫂に落した。

清水の向島のくづれ土手へ、菱々と成つて腰を支いた。前刻の婦は、勿論の事、もう居ない。が、まだいくらほどの時も経たぬと見えて、人の來て汲むものも、菜を洗ふものもなかつたのである。

ほか／＼とおなじ日向に、藤豆の花が目を圓く渠
を見た。……あの草履を黽つたのが羨し
い……赤蜻蛉が笑つて居る。

「見せようか。」

仰向けに、鐘を見つゝ、そこをちら／＼する蜻蛉
に向つて、自棄に言つた。

「いや、……自分で拜まう。」

時に青空に霧をかけた釣鐘が、忽ち黒く頭上を蔽
うて、破納屋の石臼も眼が窪み口が缺けて髑髏のや
うに見え、曼珠沙華も鬼火に燃えて、四邊が眞暗に
成つたのは、眩く心地がしたからである。――
如何に、如何に、寫眞が歴々と胸に抱いて居た、毛
絲帽子、腕の葉鹿の子のむつぎの嬰兒が、美女の袖
を消えて、拭つて除つたやうに、なくなつて居たの
であるから。

樹島は殆ど目をつむつて、まじぐらに摩耶夫人の
御堂に駈戻つた。敢て目をつむつてと言ふ、金剛神
の草鞋が、彼奴の尻をたゞき戻した事は言ふまでも
ない。

夫人の壇に戻し参らせた時は、伏せたまゝでソと置いた。嬰兒が、再び寫眞に戻つたか何うかは、疑ふだけの勇氣はなかつたさうである。

「いや、何といたしまして。．．．．．棚に、其處にござります。金、極彩色の、．．．．．は、其方の素木彫の。．．．．．いや、何といたして、古人の名作。ど、ど、どれも諸家様の御祕藏にござりませんが、少々づゝ修覆をいたす處がありまして、お預り申して居りますので。ーはい、店口にござります、その紫の袈裟を召したのは私が刻みました。祖師のお像でござりますが、喜撰法師のやうに見えます處が、業の至りませぬ、不束ゆゑで。」
と、淳朴な佛師が、やゝ啞つて口重くまじりと言ふ。

しかし此は、工人の器量を試みようとして、棚の壇に飾つた佛體に封して試に聞いたのではない。もう此の時は、樹島は既に摩耶夫人の像を依頼したあとだつたのである。

一山に寺々を構へたその一谷を町口へ出はづれの窮路、陋巷と言つた細小路で。むれるやいつな濕氣のかびの一杯に臭ふ中に、芬と白檀の薰が立つた。小さな佛師の家であつた。

一小間硝子を張つて、小形の佛翁、塔のうつし、その祖師の像などを並べた下に、年紀はまだ若さうなが、額のぬけ上つた、そして圓顔で、眉の濃い、目の柔和な男が、道の向うさがりに大きな塵塚に對しつゝ、口をへの字形に結んで泰然として、胡坐で細工盤に向つて居た。「少々拝見を、」と云つて、樹島は靜に土間へ入つて、――あこで言つた預りものだと云ふ佛、菩薩の種々相を禮しつゝ、「たゞ試みに承りたい。大な此のくらの像を一體は。」とおほよその値段を當つた。――冷々とした侘住居である。木綿縞の膝掛を拂つて、筒袖のどんつくを着た膝を居坐り直つて、それから挨拶した。そツときいて、……内心恐れた工料の、心づもりよりは五分の一だつたのに勢を得て、すぐに一體を逃へたのであつた。――

「……なれども、おみだしに預りました御注文……別して東京へお持ちに成ります事で、なりたけ、丹、丹精を抽でまして。」
と吃つて言ふ。

「あなた、佛様に御丹精は、それは實に結構ですが、お禮がお禮なんですから、お骨折では却つて恐縮です。――それに、……唯今も申しました通り、然るべき佛壇の用意もありません。勿體なくありません限り、床の間か、戸袋の上へもお据え申さうと思ひますから、かた／＼草雙紙風俗にとお願ひ申したほどなんですから、本式ではありません。ニ利天のお姿では勿體ないと思ふのですから。……お心安く願ひます。」

「はい、一應は心得ましてござります。尚ほ念のため伺ひますが、それでは、むかし御殿のお姫様、奥方のお姿でござりますな。」

「草雙紙の繪ですよ。本があると都合がいゝな。」
樹島は巻苘を吸ひさして打案じつゝ、
「倭文庫。……」

「え、え、釋迦八相——師匠の家にございまして、私よく見まして存じて居ります。いや、何うも。……」

と胸を抱くやうに腕を拱んで、

「小僧から仕立てられました、……その師匠に、三年あとになくなられましたな。杖とも柱ともみましたものを、とんと途方に暮れて居ります。漸と昨年、眞似方の細工場を持ちました。ほんの新店でござります。」

「もし、」
と、仕切一つ、薄暗い納戸から、優しい女の聲がした。

「端本になりましたけれど、五六冊ございましたよ。」

「おゝ、然うか。」
「いや、いまお捜しには及びません。」
様子

察して樹島が框から聲を掛けた。

「は、つい。」

「お乳。」

と可愛い小児の聲する。……

「めゝ、覺めて。はい……お乳あげませう

ね。
「

「のゝ様、おつぱい。……のゝ様、おつぱい。」

「うあ、のゝ様ではありません、母ちゃんよ。」

「うゝむ、欲くないの、坊、のんだの、のゝ様のおつぱい。――お雛様のやうな、のゝ様のおつぱい。」

「おや、夢を御覽だね。」

樹島は肩の震ふばかり胸にこたへた。

「嬢ちゃんですか。」

「えゝ、もう、年弱の三歳に成りますが、えゝ、

もう、はや――あゝ、何、お茶げんかい。」

唯、茶卓に注いで出した。

「あ、」

清水にきぬ洗へる美女である。先刻のまゝで、洗ひさらした銘仙の半纏を引掛けた。

「先刻は。」

「まあ、あなた。」

お目にかゝつたか。」

「え、梅鉢寺の清水の處で、――あの、摩
耶夫人様のお寺をおきなさいました。」

渠は冷い汗を流した。知らずに聞いた路なのでは
なかつたのである。

「御信心でございますわね。」

と、熟と見た目を、俯目にぼつと染めた。

むつくりとした膝を敲いて、

「それは御縁ぢや――ます、丹、丹精を
抽んでますで。」

「あ、こちらの御新姐ですか。」

と、吻として、うつかり言ふ。

「いや、え、その、師、師匠の娘でこ
ざりまして。」

「何ですな、――ねえ、坊や。」

と、敷居の内へ、片手づきに、納戸へ背
向に面を背けた。

樹島は謝禮を差出した。出来の上で、と辭して肯
ぜぬのを、平にと納めさすと、きちやうめん、硯
に直つて、ごし／＼と墨をあたつて、席書をするや
うに、受取を――

一金……圓也

「ま、ま、摩……耶の字？……あゝ、
分りました。」

「御主人。」

と樹島が手を舉げて、

「夫人のお名は、金員の下でなく、並べて

か、……上の方へ願ひます。」

「あ、あ、あひ分りました。」

「御丁寧に……では、何うぞ……

決して口を出すのではありませんが、お顔を何うぞ、
なりたけ、お綺麗になすつて下さい。……お
仕事の法にかなはないかは分りませんが。」

「あゝ、いえ。……何よりも御容貌が大切で

ございます。……赤門寺のお上人は、よく店へ

お立寄り下さいますが、てまへどもの方の事にも、
それはお悉しうございましてな。……お言に

は……相好説法……と申して、それ／＼の

備つたおん方は、唯お顔を見たばかりで、心も、身
も、命も、信心が起るのぢやと申されます。……

わけて、御女體、それはもう、端麗微妙の御面相
でなければあひなりません。――・・・てまい、
たゞ力、力が、腕、腕がござりませうか、いかゞか
と存じまするのみでして、は、はい。」

樹島は、たゞ一目散に停車場へ駈つけて、一いき
に東京へ遁げかへる覺悟をして言つた。

「御新姐の似顔ならば本懐です。」――

十二月半ばである。日短かな暮方に、寒い縁側の
戸を引いて――震災後のたてつけのくるひのた
め、しまりがつかない――竹の心張棒を構ふと
して、柱と戸の棧に、かつと極め、極めはづした不
思議のはずみに、太い竹が篠のやうにぴしゃつと撓
つて、右の手の指を二本打ひしやいだ。腕が碎けた
かと思つた――氣が遠くなつたほどである。此
の前日、夫人像出来、道中安全、出荷と言ふ、はが
きの通知をうけて居た。

のち二日目の午後、小包が届いたのである。お醫

師を煩はすほどでもなかつた。が、繻帯した手に、
待ちこがれた包を解いた。眞綿を幾重にも分けなが
らう。

両手にうけて捧げ参らす　――　罰當り・・・
頬を、唇を、と思つたのが、面を合すと、佛師の若
き妻の面でない　――　幼い時を、そのまゝに、夢
にも忘れまじき、なき母の面影であつた。

樹島は、ハツと、眞綿に据ゑたまゝ、蒼白く成つ
て飛退つた。そして、両手をついた。指はヅキ／＼
と身に應へた。

更めて、心着くと、あゝ、夫人の像の片手が、手
首から裂けて、中指、薬指が細々と、白く、葎のや
うに落ちてゐた。

此の御慈愛なかりせば、一昨日片腕は折れたであ
らう。渠は胸に抱いて泣いたのである。

尚ほ佛師から手紙が添つて　――　山妻云々との

お言、或はお戯でなかつたかも存ぜぬが、．．．．
しごとのあひだ、赤門寺のお上人が四五度もしば／＼
見えて、一定それに擬へ候やう、御許様のお母様の
倂を、おぼろげならず申傳へられましたるゆゑ
―― と此の趣であつた。

―― 樹島の事をこゝに記して ――

筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なほ夫人堂など、
兩三度、摩耶夫人の御像を寫さうとした。いまゝた
繰返しながら、その面影の影らしい影をさへ、描き
得ない拙さを、恥ぢなければならぬ。

【完】

* * * * *